

北田薄氷作品に関する一考察

—我意を貫こうとする女性たちを中心に—

一、はじめに

北田薄氷は明治九（一八七六）年に生まれた。勉学の志が高く、小学校卒業後、明治二二年に東京府高等女学校（現・都立白鷗高等学校）に進学するも、間もなく母の死に遭い、家事のために退学を余儀なくされた。しかし、家庭状況が落ち着いたためか、翌年には女子文芸学舎（現・千代田女学園）に入る。卒業直前の明治二五年、「他人の妻」（後、「三人やもめ」）に解題したと思われる）を執筆し、尾崎紅葉の紹介で『近江新報』に発表した。以後、硯友社の女流作家として、尾崎紅葉のもと、精力的に作品を発表していった。明治三一年、紅葉の媒酌により、画家・梶田半古と結婚し二子を儲けるも、明治三三年に病没した。

薄氷は作家として円熟する前に早世しており、そのため、埋もれてしまった作家であるといえよう。薄氷は尾崎紅葉に師事しており、特にその初期の作品の特徴として轟栄子は「紅葉作品の模倣と

いか換骨奪胎の感が強い」という評価を下している。また、塩田良平は「明治女流作家論」の中で同時代の女流作家たちと比較し、「一葉ほどの反抗も熱意もなくただ侘しい現実として力無く眺められてゐるにすぎなかつた」⁽²⁾、「一葉の余韻なく、稲舟の野心なく、賤子の雅なしと雖ども、幽思を湛へ現実に歎歎するその作品は、近代文学史上最後の封建女性の姿として、その豊婉なる文章と共に永く記憶さるべきであらうと思ふ。」⁽³⁾と述べている。加えて、近年は明治期の女流作家の掘り起こしが進み、徐々に評価の動きが出てきている。

薄氷は児童文学を除くほとんどの小説作品で、結婚をめぐる男女の悲劇を描いている。その多くが義理と人情に雁字搦めにされ、挙げ句に結婚生活が破綻するというものだ。そこに登場する女性の多くが小学校までの学歴しかもたず、義理を優先させて忍従に徹し不幸になる。しかし、それとは対照的に我意を立て通そうとする女性

伊藤 かわり

もしばしば登場する。彼女たちは高い教育を受けている点で、作者である薄氷と同じ土台をもっている。

彼女たちの我意はともすれば単なる我が儘とも受け取れてしまうが、それを単純に我が儘と片付けるわけにはいかない。彼女たちの我意は、本人たちにも止めたくとも止めようのないものである。その我意が周囲との軋轢を生むと知りつつ一念を貫こうとする彼女たちは、時に読者の共感をも誘う。

本稿ではそのような我意を立て通そうとする女性たちに焦点を絞って見ていきたい。そして、薄氷の作品に新たな光を当てられればよいと願っている。

二、長編「三人やもめ」

「三人やもめ」は薄氷が文壇に名を顕した最初の作品である。徹底した女嫌いの三宅香一とその妻・お清、香一を恋慕する富家の令嬢・谷田艶子の三角関係を描いた物語だが、ここで注目するのは谷田艶子である。艶子は香一とお清の仲を裂く悪役的な位置にいる。

艶子は谷田銀行頭取・谷田義信の娘で、谷田夫妻にとって「生宝とも愛づる唯一人の秘蔵娘」^(四)であり、両親が来客の前にわざわざ呼び出して自慢するほどの器量の持ち主である。小さい頃は「小供の癖に珍らしく落付きたる性分」^(三)という長所をもっている

だが、香一に恋愛感情を抱いてからは落ち着かない様子を示し始める。艶子は我意を立て通そうとするが、それは香一への恋を成就させることを目的としていた。この恋心は、艶子には止めることはできない。「何故にかく騒がしき心になりたるか、艶子は我にも分らず」^(三)とあるように、分かっているも理性では止められないものだった。彼女は自分と香一が結ばれることを疑わず、女嫌いの香一に対して積極的なアプローチを何度も試みる。

ここで、艶子も気付かないうちに、彼女の我意は香一の我意と衝突することになる。香一は自らに恋愛感情を寄せる女性に対しては徹底的な嫌悪しか抱かない。故に艶子のことを「魔者」^(二)、「鬼婆どころか夫よりも猶恐ろしき」^(四)などと心の中で表現する。艶子を避けて通ろうとするが、彼女は義理ある人の娘であり、また幼馴染としてかつてはよく一緒に遊んだ仲でもあるため、完全に無視もできない。香一は心中で激しい葛藤を繰り広げていた。

香一への恋愛感情に基づく艶子の我意が衝突していたのは、香一とだけではない。香一への恋心は両親にはまだ知られていなかったものの、結婚観をめぐって両親と激しく対立する。両親は艶子を富家に嫁入りさせたいと思っていた。谷田夫妻にとって、結婚で第一に重要なのは金銭だった。嫁入り先に十分な金銭さえあれば、たとえ愛がなくても娘は安楽に暮らせるという思惑があった。一方、艶子にとって、結婚に第一に必要なものは愛情だった。愛情があれば貧しくとも楽しく暮らせると考えていた。

この二つの価値観がぶつかり合うことになるのだが、その底流として、日本的な古いものを好む両親と、小学校卒業後に西洋人の学校に通い西洋的なものを好む艶子の間で、日常的な諍いがあつた。両親の価値観と艶子の価値観は、様々な点でぶつかり合つた。谷田夫妻は昔気質の頑固者で、秘蔵っ子である艶子を溺愛しているが、一方で艶子には「何事も圧制主義」(四)で当たつていた。それゆえ、「明治育の艶子には兎角に氣の合はぬ勝なるに、口にこそ出さね、平生に不平の浪は狭き胸の中に漂ひけり」(四)という状態に艶子はあつた。また、谷田夫妻は大の学問嫌いであり、教育は義務教育である小学校までで十分だと考えていた。特に女性がそれ以上の教育を受ければ生意気になるという考えをもつていた。これに対して艶子は毅然とした態度で両親に当たつた。艶子は「今の世は昔と違ひて追々文明に進み、外国との交際も日増に繁くなり行くにつれ、婦女にても、教育なき者は役に立たずといはる、此頃、車夫の子迄も夫々学の道に就く程なるに、況して中等以上に位する身分でありながら、此位に甘んじて廢学らるゝ者にあらず」(四)と云つて両親を説得した。そして小学校卒業後、西洋人の学校に通い、首尾よく卒業を果たす。この艶子の言い分から、艶子が学問は自らの付加価値になると信じている様子がうかがわれる。逆に谷田夫妻にとつて、さらなる教育はマイナス要素であつた。さて、勉学は許された艶子だが、髪型・服装に関しては自由を許されなかつた。艶子の好みは束髪に洋装だったが、谷田夫妻の好みは高島田に長袖の衣

装という和風のものだつた。このように様々な場面でのぶつかり合いを通して、艶子は「最早女一人の魂持てる我は機械人形を操る様な訳にはゆかぬ」(五)という境地に到るのである。

話は戻るが、艶子と谷田夫妻の価値観は、その後、結婚という局面で激しく衝突する。谷田夫妻が婿に求めるものは金銭である。対して艶子は夫となる人に愛情を求めた。艶子は次のように言う。「西の国人は自由を尊び、我娘の氣に適ひたる人と自由に添はずれば、生涯を楽に暮さるべし。仮令其家貧しければとて、夫婦心を合はせて勉強して行けば、互の愛は優りこそすれ、劣る事なしと、学校に在る時、ミツスメリーは語り給へり。」(八)ここで西洋人の恩師から受けた教えを披露したことによって、昔気質で学問嫌いの谷田氏は激怒する。そして艶子の縁談を強引に進めようとするが、艶子は我を立てて承諾しようとしな。とはいへ、彼女は親不孝と誇られることに平気でいるわけでもない。そのように詰られても貫き通そうとする艶子の我意は強固なものである。

強情な艶子を前に、谷田夫人は本音を思わず出してしまふ。「あ、儘にならぬ浮世とはいへ、我身が育てし子迄も自由にならぬとは」(七)と考えるのだが、子どもを自分の自由にしたいと願うこと自体がエゴであり、自分たちが安楽に暮らしたいからこそその娘の縁談なのだということが露呈してしまふ。しかし、親たちは純粹に娘を思つてのことだと、自分たちの心を疑うことをしない。娘のために、艶子も知らぬうちに縁談を進めた。それを後で聞かされ

て追い詰められた艶子は、香一に心の内を告白する。拒絶されて家出した艶子を、義理ゆえに香一は追い、東京の宿屋で囚らずも共に四五日過ごしてしまった。それが噂になり、その噂を払拭するため、香一はしぶしぶ縁談を受け入れる。案に相違して、見合い相手のお清とは良い夫婦になる。香一の結婚を知った艶子は自殺をはかった。

元々、香一の結婚は艶子を諦めさせるために谷田夫人が取り持ったものだったが、このままでは艶子を失いかねないと思った谷田夫妻は、仕方なく香一の母・お照を説得して、お清を離縁させる。これも恩ある谷田家のためと、お照とお清は辛い思いの中で納得する。艶子と香一は祝言を挙げるが、お清を諦められない香一は艶子に辛く当たる。ここで艶子と香一の我意が、艶子にもはっきり分かる形で衝突する。あまりの仕打ちに、艶子はい「彼様な人と初めより知りなば、世間へ善からぬ噂立てられてまで添はんとは思はざりしに」(三十九)と思ってしまう。しかし、これも自業自得と「教育のある身は有繋に思ひ切りもよく」(三十九)この事態を受け入れる覚悟をつける。艶子はこれまで我意を通すのに懸命だったが、世間という、父母よりさらに周囲に位置するものがどのように自分を評価するかまで目が行くようになった。状況を客観的に判断できる理性を取り戻したのである。そこでは「教育」の力が示唆されている。

一方の離縁されたお清は、控えめで万事によく気の付く、非の打

ちどころのない妻であり嫁であった。彼女は自分よりも周囲の人間の心を優先する。それゆえに、恋敵の艶子の心情をもよく理解していた。お清は、艶子に辛く当たる香一に「命をかけて望みの叶ひし程の艶子様なれば、今更貴郎が厭になりしなど、思はるゝ筈はなく、心には真底可愛いと思ふて居らるゝは極り切た事。夫を貴郎が強無くなさるればこそ悲しさと口惜しさの絶間なく恨も仰有らうし愚痴も出ませう。」(四十三)と言って、艶子と温かい家庭を築くように説く。しかしそれは聞き入れられず、ますます憔悴していく艶子を見かねて、谷田夫妻は艶子を実家に連れ帰る。実家に帰る直前、艶子はお清が香一に与えた手紙を読み、お清の健気な心情に打たれ、初めて他者、つまりお清の心を優先させようとする。艶子は二度と香一のもとに戻ることはなかったが、お清もまた艶子に義理立てして香一のもとには戻らなかった。香一も改心し、彼もまた一生独身で暮らすことを決意する。こうして、我意の衝突によって引き起こされた人間関係の歪みが、他者の心を優先させること(義理立て)で解消される。しかし、それは三人のやもめを生んでしまうという結果になった。「惜しや義理故に、美しく盛りりのやもめ三人出来けり。」(五十)という結末は、大団円からは程遠い。

三、短編「晩桜」

「晩桜」は『文芸倶楽部』第三卷第一四編(明治三〇年一〇月一

○日、博文館)に発表されたものである。

ここでは、「三人やもめ」の艶子と同様、大家の娘である飯田敏子に着目する。彼女は二四、五歳にもなるのに高島田に「セルの疎き縞の単衣に、牡丹を大形に織出したる糸錦の帯」(二)という一七、八歳の娘がするような派手な身なりをしていた。彼女は小さいころから病がちで内気であったが、良家の娘として恥じない教育を受けている。彼女の最大の欠点は癩癩持ちだということであった。そのことには敏子自身が最も苦しんでいて、自分をいたわる両親の心遣いを感じているからこそ「敏子が両親に対へる折の素振は、露程も我儘らしき処なく、札を重むじ言葉を柔げ、勉めて其心を安めしめむと、焦るに苦しむ色の微見ゆる」(三)と、癩癩を何とかおさめようと苦心していた。しかし、これでは人並みの幸福な結婚は無理だと、一七歳の時から縁談は断っていた。

敏子は二一歳の時、自殺を考える。しかし「教育のある身は有繋に思返して」(四)自殺を思い止まる。艶子の時と同様、ここでも教育に基づく理性の力が示唆されている。その後、敏子は「命をかけても両親を喜ばせて見たし」(四)という一念で行動していく。敏子の我意は親孝行したいという一念だった。何が親孝行になるのか。敏子は「それには日外も勧め給ひし事を承引きて、好き聲を娶りて初孫の顔も見せたく、且は子といふ可愛き者の出来るやうにならば、果敢なき我身も慰まれて、心の楽しくなると共に身も健全に、終身を面白く暮さるべし」(四)と考える。ここには孝行だけ

が目的のではなく、自分も楽になれるかもしれないとの期待も表れている。親孝行だけでは我意とは呼べないかもしれないが、それが自分が楽になりたいための望みなら、十分我意と呼んで差し支えないのではないだろうか。

さて、親孝行のために結婚を考え始めた敏子だが、その時すでに婚期を逸しており、なかなか良い相手もなく、二五歳を迎えてしまった。そこに新しい小間使い・お初がやってくる。彼女は敏子に同情し、万事に敏子の力となった。お初が世話をするようになって暫く後、お初の尽力もあって敏子に結婚相手が見つかる。だが、その相手はお初の幼馴染の婚約者であった。

敏子は結婚後の展望について、次のように語る。「女は男より老けるのが早いから、自分はいつまでも夫の愛を引き止めることはできないだろう。子どもができた後は、妾を置かれても捨てられても仕方ない。ただ、子どもを丈夫に育てて親孝行したい。そのため、子どもができるまでは何とか結婚相手の心を繋ぎとめたい」と。敏子は自分が世間的にどういう状況に置かれているかを非常によく理解していた。尚且つ、お初から婚約者を奪い取っても結婚相手を得たいという我意は、孝行の念に基づくものだった。お初はそんな敏子の覚悟を痛ましく思っつて身を引くが、敏子はそのお初の配慮に甘える。お初が屋敷を去る時、「敏子は一言も留めざりしかど、何故か涙を流て其後姿を伏拝み、堪忍してよと許に、よゝと泣ぬ。」(十)という様子だった。

敏子は「三人やもめ」の艶子とは異なり、最初から世間の思惑や他者の心に対する配慮がある程度できており、それを理解した上で我意を通す。敏子には孝行という、大義でもあり切実な一念でもあるものがあつた。だからこそ、その犠牲となつたお清は、自分も我意を立てて衝突することができなかつたのである。

四、薄氷の児童文学作品（少女お伽噺）

これまで、我意を立て通そうとする女性を二人見てきた。その変奏とも呼ぶべき少女が薄氷の児童文学作品にはしばしば登場する。

薄氷は博文館の雑誌『少年世界』に明治二八年末から三一年にかけてのおよそ三年間で一一編の作品を寄せている。その中でも明治二九年、三〇年に発表されたものについては、我意を通した少女が報いを受けるという教訓的な作品がほとんどを占めている。明治三一年は、「先生様々」「日曜日」「遊び仕舞」の三編を発表しているが、その主人公は「三人やもめ」のお清や「晩桜」のお初のような善良な少女たち、理想の少女像を描いたものとなっている。ここでは明治二九年、三〇年に発表された作品に注目したい。

児童文学を除く小説では結婚をめぐる悲劇を主に描いた薄氷だが、一方の児童文学では少女たちの生活に結婚という言葉は一切出てこない。婚姻が射程に入るのはまだずっと先の幼い少女たちを讀者として想定していたからか。では、この少女たちの我意はどこか

ら発するのか。この少女たちの我意は、おしゃれであり、遊びであり、食欲といったところから発する。遊び以外の欲求は相手のいないことでもあり、これまで見てきた我意とは少し様相は違つてくる。他者の心を優先させることによる解決はない。おしゃれ、遊び、食欲のそれぞれを代表する話を一編ずつ取り上げる。

まず、おしゃれをしたいという欲求から発する我意をもつた少女の登場する作品として、「人真似」を見てみよう。『少年世界』第三卷第七号（明治三〇年三月一五日）に掲載されたいわゆる（少女お伽噺）である。

主人公のお梅は七歳、小学校に上がったばかりのかわいらしい女の子である。鷹揚な気高い顔立ちをしており、母は氣を使つて、おしゃまに見えないようにとあえておかつば頭にさせている。お梅は他の子のように髪を結いたいという欲求を抱いていた。いつもは母の言うことを聞きわかる良い子なのに、この時ばかりはどんなに論してもおとなしくならない。果ては髪を結つてくれないのなら、ご飯もいらぬ、学校にも行かないと強情を張る。普段は言うことをきくお梅にとつて、この欲求は小さい子どもなりに自分の人生（生活）をかけた一念なのである。その必死さは艶子や敏子と変わらぬいかもしれないが、お梅は我意を立て通すことに懸命になるあまり、母の配慮や優しさにまで思い至らない。果ては他の子の母を羨ましいとまで思い出す始末である。母はとうとう折れて、髪を結うことを承諾した。お梅は有頂天になつて大きな附鬢と派手な簪を選

ぶ。しかしそれはお梅のおかつば頭に付けるのが難しい代物だった。母が苦心して付けたものの、頭が重く、遊戯の時間に激しい運動をして落として壊してしまう。学校に遅れてまで附鬘をつけてきたことで他の子どもたちにも嘲され、非難される。この時になって初めてお梅は自分の置かれている状況を理解する。艶子や敏子の場合、その身に受けた教育が理性を支えてくれたが、お梅にはそれほどのものはない。お梅は頭を痛めて学校を長期欠席し、授業についていけず落第するという報いを受ける。

続いて、遊びたいという欲求を貰いた少女を描いた「おいてければ」(『少年世界』第三卷第一七号、明治三〇年八月一〇日)に目を移そう。

主人公・花子は立派なお家の一人娘で数えて五歳、忠実な守のおいちが付いているが、おいちは泥遊びをさせてくれない。自分の思い通りに遊びたいと思った花子はある日、機転をきかせておいちを家に帰らせ、その隙に一人で遊びに行ってしまう。花子は偶然出会った七、八歳から十二、三歳の女の子たちが中心の貧乏人の子どもたちと出会い、仲間に入る。花子は結局、その子たちに利用されていじめられ、最後は目隠し鬼の鬼をさせられている間においてけぼりにされる。花子はいちの傍にいればよかったと心底から後悔する。この時、外に出れば力弱い存在である自分の立場を理解し、以後はいちの言うことをよく聞くようになる。自分をやや客観視できるようにになったが、花子の心の傷を思えば大きな代償を払わされた

といえよう。

最後に食欲が我意のもとなった少女として「食辛棒」(『少年世界』第三卷第二三三号・第二四号、明治三〇年一月一日・一五五)のお鶴を挙げておこう。

お鶴は一〇歳、お転婆で食いしん坊、妹のお亀には意地汚いと思われる。母親はお鶴とお亀に公平に菓子を与えるが、お鶴はどろりとした妹の分のお菓子まで食べようと画策する。そのためにまず妹を飯事遊びに誘う。そこではお鶴は貧乏人の子の役で、お金持ちの子の役のお亀に、お菓子を配り物にさせる。それがうまくいかなかったら、お鶴は飴やの真似をして踊る。果ては菓子を口で受け取る芸当までするが、夢中になるあまり柱にぶつかり泣きわめく。その後はどうなったのか。お鶴が自らを多少でも客観視できるようになったかどうかは語られていない。

以上、児童文学に関しては三作品を見てきたが、いずれも薄氷が高度な教育で得られると考えているところの理性が備わっていない状態なので、我意を通すといっても、「三人やもめ」の艶子や「晩桜」の敏子とは異なり、自己中心的な部分が増している。しかし、「人真似」のお梅は元来が善良な性質をもっており、「おいてければ」の花子や「食辛棒」のお鶴は我意を通すために機転をはたかせたその点において、自分の状況を客観視できるようになる可能性はもっているといえる。薄氷作品の我意を通そうとする女性の変形(あるいは元の姿)がここに現れている。

五、おわりに

薄水は、義理と人情の板挟みとなって忍従を強いられ、犠牲となる女性を描いた。本稿では、そんな女性たちとは対照的に我意を通そうとする女性と、その変奏である少女たちについて見てきた。彼女たちは当時の女性としては高い教育を受けており、また（少女お伽噺）に描かれた少女たちはそれを補うように機転が与えられていた。義理のために忍従に甘んじる女性と並べると、彼女たちは悪役的な地位にある。しかし、それは単なる悪役ではない。薄水は我意を通そうとする心の翳を繊細に生き生きと描き出した。彼女たちは義理や他人の心を無視するのではない。それを知ることのできる素質は用意されているし、それを知った上で我意を通さずにはいられないのである。しかし、その先には忍従する女性たちと同様の悲劇が待っている。結局、忍従に甘んじようと我意を通そうと到る所は同じであった。両者ともに、薄水の表裏をなしているのではない。我意を通そうとする女性は、いわば小学校卒業後もさらなる勉学を志した薄水が投影された姿なのかもしれない。

注

- (一) 轟栄子『北田薄水研究』一四頁。
 (二) 『明治文学全集 八一 明治女流文学集(一)』四一三頁。
 (三) 前掲書四一四頁。
 (四) 「三人やもめ」「晩桜」からの引用は、全て『薄水遺稿』(一九〇一年一

二月一日、春陽堂)によった。なお引用に際して旧字は新字に改め仮名遣いはそのままとし、ルビは全て省略した。引用末尾の括弧内の漢数字は章番号を表している。

参考文献

- 轟栄子『北田薄水研究』一九八四年三月一九日、双文社出版
 『明治文学全集 八一 明治女流文学集(一)』一九六六年八月一〇日、筑摩書房
 藤本芳則「北田薄水の児童文学」〔児童文学研究〕第一七号、一九八六年四月二〇日、日本児童文学学会
 『(新編)日本女性文学全集 第二卷』二〇〇八年九月二一日、青柿堂